

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成28(2016)年
11月号
通巻555号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成28年11月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



戸隠山 奈良市 岸田 哲さん撮影 (関連記事3～4頁)

再録 昭和41(1966)年9月23日発行『すさのお』第9号より

永遠の時を生きる

法主 矢追日聖 (満54歳)

心と心を開きあう

どこの宗教でも、欲はいけないとか、自我没却とか、人の為になるようなことをせよとか、つまり感謝して功德を積み重ねることですが、どれもこれも誠に結構な教えです。大勢の社会人の殆どが何かの宗教によるか、また何かを信仰しています。然し教え通り、その心構えでその日その日を暮らしている人が何人あるでしょうか。何か自分の欲望を達するために信仰を続けているのではなからうか、と時々思うことがあります。

勿論、生活しておれば、あれもほしい、こつもしたいと願うことが多々あるものです。宗教でいう「いけない欲」とは何ぞやと皆様も考えられることがあるでしょう。神様は、人間は、人間として生きてゆく上のあらゆる条件を許しています。牛は牛として、魚は魚として、鳥は鳥としてという風にね。

欲と限界

人間にも自然が定めた個人差があります。その人なりの生き方、それに必要とするものを望むことは欲ではありませぬ。我が身に備わっているものは自然に集まってくるのですが、自分に備わっている限界を自分で知る所に大きな問題があるのです。しかし、これは一般論として説明ができませんから、自分でよくお考え下さい。

孤独の集まり

話は変わりますが、私もあなたもどうせ何時か死ぬ日が訪れます。いやなことですがこれは否定できないでしょう。衣食住を問題にするのは、この生きている僅かの期間だけです。仮の住居であり、仮の衣服であり、仮の食事に過ぎないのです。ひとたび、火葬場の煙となって、素焼きの壺へ無造作にほうり込まれた白骨が、何年か生かされ生きてきた最後の姿です。この白骨は衣食住を求めたり、所有権の主張は致しません。私の場合も、あなたの場合も同じことなんです。

生まれてくるときも孤独であるし、死ぬときも孤独です。この生と死の間に、綾なす人間模様ができるのです。楽しんだり、苦しんだり、迷ったり、悩んだり、怒ったり、悲しんだり、こうしたものが織りなされて人生は終わってゆきます。

どうも湿っぽい話になりましたが、だからこそ孤独の人間同士が織りなす人生模様は、楽しき明かるいものにしたいです。縦系になる人も、横系になる人もあるでしょう。私とあなたが仲よくなれば、それだけ社会は美しく、お互いに喜びをもつ暮らしができるのです。あなたが更に誰かと仲よくなれば、また私が多くの人々と仲よくなれ

法主寸言

大倭教は、単に法主が信人に何かを教え導くというだけのものではなく、何かを教えられ、教えあう中で、法主と共に皆の力をあつめて社会のために仕事をやっていこうとするものです。

ば、お互いに現界の喜びが大きくなると思います。

総て借り物

この世の中に自分（本霊、魂、精神、心）の物は一つありません。自分が宿っている肉体も実は借り物で、自分の物であれば死なせたり、病気にもさせない筈ですが、我が物でないために仕方ありません。一切が借り物であることが分かれれば、「これは自分の物である」という考え方を改めなくては、永遠の生命体である自分が苦悩することになりますからね。

今年の五月七日でした。奈良の人ですが、一年九ヶ月になる女の子の為体の知れない病気について相談に来たのです。この子はハシカに似た風邪気はあったのですが、夜になると泣いて寝床では絶対眠らないから、仕方なくおんぶして夜をあかすらしいのです。その泣き方が普通ではなく、薄気味悪く、バアチャンヤ……と泣き泣き声を出すらしい。

執着心の力

この話をじつと聞いてみると、この屋敷の先住者と思われる人の、この家屋、宅地に対する強烈な執着の心が、邪念の靈波になって襲っている動きが現われてきたのです。こうした感応を一応話して、現在の住居の事情について聞いてみたのです。

要約して言えば、その家というのは断絶した人の家屋、宅地だったということです。この子供の祖父が弟の身分であったため分家して住まったのがこの家で、その後、間もなく本家は家、宅地を売り払って何でも岸和田の方へ移ったとか。

祖父はその古い家屋は建て替えて住まっていたが、

最初に生まれた長女や長男は未熟児で早産し、どちらも死亡してしまった。次に九ヶ月で生まれた男子が育って、この子供の父親になっているのです。

断絶したこの屋敷の先住者は、俗に言う無縁さんとか、浮かばれない迷える亡霊という類になっているわけですね。

そこで先住者の氏（＝血筋・家柄）が田舎のことですから分かっていたので、その氏の先祖代々の霊を私なりに浄化してやりました。そして一週間程、別にその家の仏壇で御膳を供えさせたのです。つまり先住者の霊と現住者と仲よく生活するように私が仲をとりましたということになります。うまく和解したのでしょうか。子供の奇病はけろりと治ったようです。

心の結び

仲よくなるということは、人生に於いてどれだけ大切なことであるか、お分かりと思います。人間と人間が仲よく暮らすことがなかなか難しい。であるのに、更に目に見えない霊界人とも仲よくしなければ喜びをもつ暮らしは難しいということになります。あなたはどうか考えますか。

結局、心の結びが大切です。お互いの肉体も借り物ですから、心と心が仲よくなるように努めましょう。何はさておき、先ず私とあなたが仲よしになりましょう。

この世だけでなしに、あの世までもね。肉体は死滅します。しかしその肉体を借りてこの世に生かされ生きている私とあなたは、永遠の世界、生死のない世界に生きています。そこは和やかな、大らかな世界です。

（昭四十二年十月十五日 日聖記）

故矢追盛賢さんによせて

心の告別式

あじさい色 杉本 順一

過日矢追盛賢さんが帰幽されたとき、ふと思いついたことがあります。拜殿でどなたかのご葬儀があったときの事です。法主さんが式典会場の大看板の前で葬儀告別式の字を見ながら、「葬儀より告別が大事なんや」とおっしゃいました。その時は、あまり深く考えずに、そうゆうものか：：と思つたものでした。30年ほど前の事です。

ところが其の事を考え得る時が来てしまったのです。それは此度の矢追盛賢さんの葬儀は、斎場の都合で先に伸び、帰幽日(6月28日)から通夜の日(30日)まで、彼のご遺体を大倭会館の大広間でお預かりすることになりました。この延べ3日の間にたくさんの方々が盛賢さんへの、言葉にならない心による告別の辞を述べられていたのです。

7月1日、僧侶の読経も終わり出棺前の最後のお別れが始まりました。私は親族として早めにお花を供え、少し離れて眺めておりました。その時です、突然「ミンナ ドンナフウニ シテクレルカ ミテルネン」(皆どんな風にしてくれるか見てるねん)との声を感じた。ええっ、うそ、モリカッチャン? その席では声にも出せませんでした。

「出棺」の声にも私も行動を起こし、葬儀用の車の後をマイクロバスで付いて行きました。火葬場に到着して、最後の読経が始まり焼香が始まりました。私の番になって、なぜか頭がくらくらしが皆さんと同様別れを惜しみつつも蓋が閉められ

た。お骨揚げの時間を待つ間に、予約されていたレストランで全員で昼食を頂く。再びマイクロバスで火葬場に行きました。

全員無言である。やがて蓋が開けられて、すっかり骨だけになったモリカッチャンと再会です。又もや突然、「アツナイネン」(熱ないねん)との声を感じましたが、これはさすがに自分が勝手に考えた事だろうと、即座に否定の気持ちになりました。その途端、「ワカツテクレテ アリガトウ」(分かってくれて有り難う)と感じてしまった。これはやっぱりモリカッチャンの心と、そう思うしかありませんでした。

それから35日ほど過ぎた頃、世間様のご都合で日数としては早すぎる8月8日に、大倭会館にて四十九日(満中陰)の法要が行われました。当日は、遅くまで賑やかに古い写真を見てたくさんの方が盛賢さんを偲ばれていました。

私はその数日前に、「ツギノヒガ タノシミヤネン」(次の日が楽しみやねん)との声を感じました。どういう意味か?

8月16日が本当の五十日祭でした。邑で全員がそろつてのお祭りはされませんでした。私は自宅で家族4人と、夕食時に彼の五十日祭をしたところ、「アシタカラ シンセカイヤ」とモリカッチャンの声。「明日から新世界」というこの言葉は、私には無い感覚です。この一言はモリカッチャンらしいと家族全員大笑い。さすが彼らしいユーモアのある真実でした。

そして次の日は8月17日(旧7月15日)東光大祭・祖霊祭でした。

この事があつて思うのは鈴月かあさんのよく言われていた「死んだら死んだらべーと違うで」(死んだらすべてが終わるわけではない)との教え、そして法主さんの言われた「顕幽不二(霊

界と現界は、ばらばらにあるものではない)という教えと告別の大切さです。これを心にたたき込んでくれた盛賢さんありがとう。重い使命を見事に果たされたのご帰幽、ほんとうにお疲れ様でした。そしてこれからもよろしく。

登美之郷だより

群馬県安中市 桜井 節子

▼私は長い間、藤原秀郷については将玄坊様のかたき、といった意識でした。法主様の正覚坊大善神というお示しを渡された時は、目からうろこが落ちるといいますか、和の光の意味するところを存分に知らされ、一時言葉を失いました。対立闘争の心は自然の志に反逆すると教えて頂いているのに学んでいなかったのです。ここまで用意されていたこと、法主様には深く感謝です。いっしょに秀郷公に対するわだかまりはすっかり消え、両者共に、平安時代に懸命に生きたものものふなりと思えるようになりました。今回、冬崎流峰さんにお参り頂いて大変喜んでいきます。

▼法主様が示されたこと——「北への道しるべ」
「霊界に於いて関東の中心、言ってみればNHKのような所」と言われました。将玄坊様の霊地ではありますが、遠い昔々、西のヤマトから北を指した人々が足を止め、あるいは先に行くことを断念した人達が、自然、神に祈りを捧げた所であると、そう私は理解しております。そうでなければ、何千年と時代が経って、霊界で八階座の平将門公が、この地に導かれるはずがないと思えます。現界と霊界を結ぶことの出来る法主様の出現がなければわからなかったことです。縁とは不思議です。不思議としか言いがありません。

※林修三・岸田哲さんに届いたお手紙から抜粋させて頂きました。次頁参照。(編集部)

こもれる魂魄の地を訪ねて (第45回)

新皇教宮の和の光

大阪府枚方市 林 修 三

本年の八月十八日、東光大祭の次の日でしたが、私と岸田哲さんの二人で安中の新皇教宮を訪れました。早朝に京都駅で待ち合わせ、東海道新幹線・上越新幹線と乗り継ぎ、埼玉の「本庄早稲田」というさみしい駅で降りました。実はここで冬崎流峰さんという方と待ち合わせをしており、埼玉県蓮田市から来られる冬崎さんの車に便乗して三人で新皇教宮へ赴くという計画でした。午後一時前、無事落ち合うことが出来、新皇教宮を目指しました。流峰さんの元気な姿を見、乗り込んだ車中で軽口をたたきながら、私は安堵の心をかみしめ二年近く前の出来事を思い返していました。

平成二十六年、野本三吉・阿木幸男・岸田哲さん達を中心とする「賑栄い塾」が新潟県佐渡市の平田弘之さんの宿「桃華苑」で開かれ、私には「佐渡の日蓮」について語れとの楽しくも恐ろしいテーマが与えられていました。短時間の講演ではあったのですが、大倭に縁のある者としていいかげんな言説もゆるされず、多くの時間を「日蓮」への探求にあててきて大役をどうにか果たすと、その夜、行われた直会に参加しました。その時たまたま横に座っておられたのが流峰さんだったのです。それ迄、お互い顔見知りではあったのですが、そんなに親しいという程の仲でもなかった。：。とにかくも、一つ荷の下りた気楽さで、思わず数日後に行く予定だった大倭文化行事の事を、流峰さんに語りかけていました。というのも、その年の文化行事の行き先は「新皇教宮」であり、



左から桜井さんご夫妻、冬崎流峰さん、林修三

これは私が言い出しついでで決定したいきさつもあり、賑栄い塾の次の大きなイベントとしての責任を感じていたのでしよう。

恐らく、平将門公についてそれほど興味をお持ちではないと思われた流峰さんにも語りかけたという衝動が私の中にあつたのだと思います。それでもこやかに私の話を聞いて下さる流峰さんがあり

りがたく、一通り話し終えたその時、思わず耳を疑う言葉が流峰さんの口から語られました。「実は僕はよく、何故だかわからないけど心魅かれて栃木県佐野市にある『唐沢山神社』という所に行くんだよ。そこは藤原秀郷公をお祀りしている神社で、調べてみると僕自身も秀郷公の末裔である事もわかったんだよ」

秀郷公と言えば、将門公と敵対し将門公を討つた武将です。その時、私の頭の中でゴングが鳴った気がしました。「次はいよいよ新皇教宮だよ」と告げるように……。

文化行事の折に、流峰さんに教宮に来ていただくべくお誘いしたのですが、先約があり不可能との事でした。そこで当日、私は教宮から電話で、私達のおまじりの同時刻に、流峰さんにも心を寄せて下さる様お願いしたのでした。

またいつか、必ず流峰さんを教宮にお連れしたいという思いが強く残りました。そして今回、後述の「表紙写真について」で書いた様なきさつ

があり、戸隠行きが決まった時、思い切つて途中で新皇教宮へお伺いするという提案をして受け入れていただいたのでした。

お約束の二時をはるかに過ぎて新皇教宮に到着すると、温かく私たちをお迎えくださる桜井さんご夫妻の姿がありました。将玄坊大善神（＝法王様の付けられた平将門公の法名）をお祀りしている本殿の、向かって左側に、通常はない「正覚坊大善神」の祭壇が設けられていました。正覚坊大善神とは、法主様の亡くなった後、書き遺されていたことがわかった藤原秀郷公の法名です。皆でささやかなお祭りをを行い、将玄坊様、正覚坊様双方に縁のある方々が「和の光」に包まれる様、祈りを捧げました。そこに突然、遠藤浩子さんも、東光大祭の折に私達の教宮行きを知って船橋市（千葉県）からわざわざ来られたので、六人で教務所でお茶をいただきながら楽しい一時間を過ごしました。

お別れの時、流峰さんは「本当に良い所だ。今度は妻と一緒に来てみたい」と挨拶をしておられました。今回の出会いが、教宮での何か新しい動きへの始まりとなる事を祈り、ここに皆様に小さな文化行事のご報告とさせていただきます。

表紙写真について

本年六月号『おやまと』紙の「風ぐるま」に文章を書いて下さった冬崎流峰さんに誘われて、岸田哲さんと共に、流峰さんが「山小屋の会」と称される仲間の方々と十数年の歳月を費やして、基礎の土台や屋根等の一部を除いて自力で建てられたという、長野県戸隠にある別荘にお邪魔しました。流峰さんのご家族何人かの方が参集して「ミニ賑栄い塾」となりました。表紙写真は、別荘から撮られた戸隠山の眺め。

シリーズ

大倭への道・大倭からの道

東京都日野市 草場 清 則(土竜実)

1 大倭への道

山と川に挟まれた北九州の小さな部落に生を得た。父母はその日の生活の糧をえるため、朝早くから夜遅くまで働いていた。戦後の混乱の中、東京で知り合い、九州唐津に戻った父母だった。貧しい農家。共稼ぎし子供の面倒を見る暇は無く、父の自慢は「米の心配だけはお前達にかけなかった」だった。子供の頃は近所のガキ大将達と徒党を組み、山河を駆け巡り魚や山菜・小鳥・小動物を捕え食事の糧の一部にした。空いている時間は兄弟達で山の開墾に明け暮れた。山を削り穴を掘り、刈ってきた草木を入れ苗床にし、蜜柑の苗木を植えた。体には生傷が絶えず、身体のだこも痛くない時、不思議な気がしたことを覚えている。親達も子ども達も必死にその日を生きていた。幸い高校は奨学金を得て、人並みのクラブ活動もできた。弓道部に入り、部活動に明け暮れた。大学入試に落ち、東京へ出てきた。バイトをしながら、予備校へ通った。宮沢賢治に憧れ、大学は農芸化学科を選んだ。千葉にある大学は、成田闘争の渦中にあり、気がつけば、成田の農家に援農、ベ平連にエスプラント会の仲間と参加していた。ある女性に言われた言葉が、印象的だ。「美(みのる)は、デモの最後から従って行き、皆が撤退する頃に石を拾って逮捕されるタイプだよ。ね。似合わないかなあ」

学園闘争が下火になり、就職に関心を失った私は、自分なりに、当時からかえった矛盾解決のプロセスを理想的な生活形態・共同生活体にも求めるようになった。イスラエルの農業共同体キブツに関心を持ち、岸田哲さん(キブツ協会、後に紫陽花邑へ)と知り合ったのもその頃である。農業共同体を目指し、多摩の府中市で『ぐるーぷ・もぐら』という共同生活体を作った。防水の仕事を生業とし、農場を作るための資金稼ぎをした。その時期、東大の助教だった見田宗介さんの家庭にもよく邪魔した。『もぐら』を訊あつて出た私は、知り合いの子(3歳?)を預かり子連れで、名古屋の障害者の共同体『わっぱ』・農業を共同化していた『東山産業』・一体生活で鶏を飼っていた『山岸会』、そしてFIWCの交流の家(ハンセン病回復者の宿泊施設)がある『紫陽花邑』を訪ねた。



当時の共同体を転々として居心地の良い紫陽花邑で、自分の住み込みをきめこんでいた。一番長い滞在も紫陽花邑で、当時のレリーフ工場に勤めた。藤沢抱一弁護士との出会いもここでである。紫陽花邑で多くの出会いがあったが、法主さんとの時間が一番印象深い。「美(私の事)は、生き方が共同体だよな。神ながらだよ」、法主さんの言葉だ。姉の体調不良もあり、面倒を見るために東京に戻った私を、東京に来たからと訪ねて頂いたこともあった。「何時か、紫陽花邑に戻ります」と法主さんとの約束を果たさないまま今に至っている。

2 大倭からの道

として私も現場で職長として一緒に走り回った期間だった。バブルが弾け、スーパーゼネコンの一次下請け会社となり、社員と生き残りをかけて多能工会社に切り替え、多くの技術習得に向け動いた次の10年。そしてエコを提案できる会社としてエコ事業部を作り、太陽光パネルの設置やエコ塗料の施工をしたり温暖化防止技術を作ることを意識しながら走ったこの10年になるように思う。

8年前から国際展示場『建築再生展』に、自社の防水とエコ技術を出展するようになる。毎年出展してきており、この2年は、『建築建材展』にも出展し始めた。目的は、市場ニーズをつかむこと。新たな技術連携のきっかけをつかむこと。エコを提案できる防水会社の意義を問い宣伝すること。

同時に、東京都に1回目の経営革新計画を承認してもらおう。建物防水を長期に維持できる高強度ウレタン防水の提案。『超速硬化ウレタンスプレー』というこの素材はスカイツリーの屋上に採用され50年は持つと言われている。卵に吹き付け防水すれば卵は万力でしめても割れず叩きつくとボールのように弾む。スクラップ・アンド・ビルトと言われた、建物を壊して作り直すことが当たり前前の時代から、建物を100年以上使うことを前提とした防水システムの提案である。同時に、現在1週間の工期を必要としている防水工事を、工場で高強度ウレタンをシート化することにより、短時間で完了できる高性能防水工法。今後、建築技術者が危機的に減少すると言われるが、熟練を必要とせず短時間で高機能防水を可能とする。

経営革新計画2回目を一昨年、東京都に承認された。都立産業技術研究所の『異業種交流会』にも参加するようになり、異業種の会社10数社と守秘義務契約を結び連携し新しい技術開発を進める。

ように最近はなっている。

展示会を通じたもう一つの展開は、UR都市再生機構等にも認められるようになり、URの清瀬実験棟にて浴室の新しい防水工法のテスト施工等も行うようになった。短時間で高機能の防水が可能で工法は、幾つかの特許にもなった。

日本の防水業界の多くのメーカーは、10年保証システムで動いている。この8年の展開結果として、15年以上の建物の防水システムを提案する会社として、『多摩防水技研㈱』はメーカーになろうと試みる。団地などに住む人達の浴室を、暖かい入浴しやすい住まいへと、安価で変身させる可能性も持つ。60年が寿命と言われる団地群の、100年寿命は当たり前の時代への転換も可能かも知れない。……可能かどうか神のみぞ知るだが。

30年以上、建築工事現場の職長として働いた。そこで共に働いた職人さんの8割近くが、厚生年金に加入せず国民年金すら加入していない人も多いと思う。来年11月をめどに、厚生年金に加入しない人達の多くを建築現場から締め出すシステムが動く。職人さんの厚生年金などを福利厚生費として施主に請求させるシステムも動き出す。だが、現在60歳を過ぎている職人さんにとって、これは無縁のシステムと思う。ホームレス予備軍の多くの職人さんと思う時、現状の生活保護は間違いないが、破産するだろう。対策は講じなければならぬが、やけどするまで動かないのが今の社会だ。『認定NPOやまぼうし』は、幾つかのグループホームを運営している。グループホームもこれらの解決策の一つだろう。

メーカーとしての、工場システムの一部に、障害者や年老いた職人さん達が働ける部署を同時に作ればと思う。また、夢想であり夢の範囲を一

歩も出ていないのだが。

60歳を過ぎた友人達と話す。無意味なお金と愚痴を後世に残すのでは無く、孫の世代に胸を張り残せる物を一つでも多く作りたい。残す努力の痕跡ぐらゐは残したいものだ。今年2月。久しぶりに見田宗介さんに会った。「歴史の曲がり角。決して原始に帰るのではない。近代の成果を十分に踏まえた上で、高められた地平を安定して持続する『高原(プラトール)』というコンセプトです」。

朝日新聞のインタビュ記事の一部だが、言いえて妙だ。混沌とした見えにくい未来を前に、今得ているものをプラトールの視点から次に残す形にしたい。

30年経過した私の会社は、一社としての活動から、異業種交流会グループや、防水の工業会・メーカーやNPOやまぼうし等、多くの連携の中で動いている。独立した多くの組織が、ゆるやかな自立した存在として連携し、次の時代を見つめ作るうねりへと、時代が変わることを願う。

先日招かれてある企業のトップと話す機会があった。「今までの会社は、何もせず波風を立てない社員が理想と、上役に言い聞かされて来ました。今は、優れた技術や発想を発掘したり作ったりし、自説を主張できない社員は評価されない時代にむかっている気がします」……少しずつだが時代は変わりつつある。

紫陽花邑には、帰りがつかないかも知れない。だが時間と空間を越え、多摩地区に「認定NPOやまぼうし」や、新たな協働企業体『多摩防水技研㈱』等を核に、幾つかのコア(企業とNPO)とサテライトで織りなす街中の邑が出来ればと考える。「実『みのる』は、共同体だから。神ながらだよ」、法主さんの言葉が今も私を励まし導く。

寸 莎

第122回

のりあき
矢追 法亮さん



試行錯誤の中で

今回の「寸莎」では軽費老人ホーム・大倭滝の峰荘で生活相談員を務める矢追法亮さんに登場してもらうことにした。若い世代の法亮さんが最近になって法主様のことや矢追家の歴史や大倭といったことに強い興味を抱くようになったと耳にしたので、ぜひお話しを聞かせてもらおうと思ったのである。

ごく順調に育った若者なのではないかと勝手に想像していたのだが、予想に反して試行錯誤をくり返した青少年時代を過ごしてきたと知って、いっそ興味をかき立てられた。

法亮さんは、法主様の甥で大倭滝の峰荘の荘長の矢追義法さんの長男として昭和56年12月21日に奈良で誕生した。今年で35歳である。

小学校3年までは水泳、ピアノ、習字などの習いごともしていたが、

「小学3年で少年野球クラブの『やまと』に入団してからは、中学1年の夏休みまで野球に熱中した。左ききだったので主に外野を守った」と楽し気に話してくれた。

転機は富雄南中学1年の時にやってきた。「一緒に野球をやってきた仲間たちが硬式野球のリトルリーグに移っていった、自分もそうしたかったのだが、親に反対された。そのこともあって長い反抗期に入り、不登校になってしまった」と今は淡々と語る。だが級友や先生には恵まれていたようで、「家に友達や担任の先生はよく来てくれたし、授業には出なかったものの昼休みには友達と校庭でサッカーで遊んだりした」というから、かなり変則的な不登校だったようだ。おまけに、修学旅行や卒業式にも参加している。

この時期、フリースクールにも通っていて、「そこで料理づくりをし

たり、北海道の牧場で牛舎の手伝いをした」という貴重な体験もしている。そうした彼に対して、「母親は多少小言を言っていたが、父親は黙って見守ってくれていた」という。

高校進学は「内申書が出ないので」、定時制の県立奈良高校に通ったが、そこが面白かったという。

「ヤンキーやいじめられっ子、オタクや高卒の資格がとりたいたいお年寄りまで、雑多な生徒がいた。いじめられっ子もここではいじめられなかったし、本当に色々勉強になった」という。昼間は昼間で、「配達や販売や魚さばきなど色々なバイトをして、どこでも結構可愛がられた」と当時をなつかしむ。

定時制高校の最終年に、もうひとつの転機がやってきた。「母方の祖母が亡くなった際、死に目に会えなかった。その時、自分は何もしてあげられなかったとハッと思い当たり、どこかで気持ちのスイッチが切りかわった」といい、「ちょうどその頃に父親が学校のパンフレットを持ってきてくれて、京阪奈社会福祉専門学校の介護福祉科に入学することを決心する。

専門学校の実習で老人ホームへ行って、はじめて老人の介護にかかわることになった。「職員の方々には可愛がってもらったし、新鮮な体験

になった」という法亮さんの話しを聞くと、どこでも新たな体験を柔軟に受け入れ、いい人間関係を育てていく資質の持主であると感ずる。

卒業後、自分で選んで特別養護老人ホームや老人保健施設で7年間働いたあと、平成22年4月から父親に頼んで現在の滝の峰荘で仕事をはじめた。その後、仕事の傍ら試験勉強をして介護支援専門員や社会福祉士といった難しい資格を次々と取得していったところからみると、法亮さんの不登校は決して勉強がきらいだったわけではなかったということがよくわかる。

冒頭で紹介したように、最近は大倭や矢追の先祖といったことを「自分の中でもっとしっかりと理解していきたくて」、法主様の文章やその他の資料を読みはじめているという。

「滝の峰荘のこれからについては色々悩みはあるが、福祉制度の狭間で深刻な問題を抱えて悩んでいる地域の高齢者にとってのよき受け皿になれば」と意欲を語ってくれた。

30歳の時に職場仲間と結婚し、2人の子宝に恵まれた。

法主様の「仲良くせよ」という言葉は心に響いていて、「もっと謙虚で素直な人間になりたい」と思っているとのこと。(聞き手 岸田哲)

あじつ日記

10月15日 大倭神宮月次祭。

午後、交流の家でF I W C 定例委員会が行われました。

10月22日 月次祭はじめお祭りの前は、大倭会館で有志の皆さんがお餅を搗いたり野菜を洗ったりとお供えの準備のために集まってくれています。

10月23日 大倭大本宮月次祭。山崎基央・スパラック夫妻(岡山県真庭市美甘)がお参りされました。半年振りとのこと。

10月24日 午後、瀧ひでみさん(大阪府吹田市千里山)が来邑されました。

10月25日 夜、教務本庁で『おおよまと』編集会議。編集会議は毎月2回やっています。今月は11日とこの日でした。

10月30~31日 第332回大倭会秋の一泊文化行事。四国高松から瀬戸内海横断の旅に参加者は26名でした。昇ちゃんも朝6時台に山崎正知さんが、7時台に岸野春子さんののぞきに行くともう家を出ていて、元氣一杯バスに乗りました。詳細は次月号で報告の予定。

11月6日 大倭神宮月次祭。

この日、田中朋子・金若日佐美さん(兵庫県尼崎市)が大倭神宮に参拝の後、邑に来られて案内役の藤本宏秋さん(京都府宮津市)、林修三・杉本順一さ

らと教務本庁で歓談されました。

夜7時から大倭会館において邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では(菅原園)

10月22日 運動会。パン食い競争・玉入れなどフロア対抗で競い合いました。

11月3日 創作活動で、焼き芋とスイートポテト作り。

(須加宮寮)

10月12~13日 宿泊旅行で19名が和歌山方面へ。

11月6日 家族交流会は須加宮寮の一大行事です。ご家族や福祉事務所の方をお招きし須加宮寮の歴史をスライドショーで上映し昔を懐かしみました。

(長曾根寮)

10月20日(特養) 誕生会で7名(内卒寿1名)の方のお祝い。

10月27日(デイ) おやつ作りは「かぼちゃの白玉団子」です。

ご利用者が白玉団子を丸め、ゆでた後、あずきをトッピング。

(茂毛菰園)

10月19日 毎月第二水曜日は書道クラブです。

10月31日 およつの時間に職員が仮装して各フロアを周り、ハロウィン気分を演出しました。

(八重垣園)

10月13日 八重垣園のすぐ近くの土手にスズメバチの巣を発見! 業者さんによる駆除が行われました。

いじればみ 怒りなご

三重県名張市 服部洋平

人間というのは、怒るのが当たり前の生き物なんではないでしょうか。怒りは生きる根源、生きる力という考え方、怒りを完全に消す事は出来ないが少しでも消した方が良くという考え方、怒りという感情は元々なく、大人や社会によって植え付けられたという考え方、等々いろいろな考え方があっていいと思います。

私自身は怒りを少しでも消そうと思っ生きています。

ある高名なヨーガ行者の話です。「私の最高の師は祖父です。

祖父が怒ったのを一度も見た事はありません。親や親戚に聴いても同様の答えでした。母が『なぜ怒らなごにいられるの?』と聴くと、『お天道様の事を考えると申し訳ない』言っました。ある日、いつもはそんな事言わないのに『身体に気をつけて頑張るんだぞ』と言っ送り出してくれました。その日の夕方、『ちよつと横になる』と言っ横になり、そのまま息を引き取りました」

この方は聖者でも修行者でもありません。一般庶民です。市井にこのような方がいたという事実に大きな喜びを感じます。

日聖祭のご案内

平成28年 12月23日(祝)

大倭七十三年 元旦

法主日聖師の御誕生を記念する祭典

○午前10時、法主様の奥津城に参拝。

○午前10時30分より大倭大本宮拝殿において日聖祭がとり行われます。

○午後1時より、大倭会館で祝賀の会が催されます。直会弁当を頂きながら、直会演芸会として、隠し芸など披露して頂ける方を募っています。

楽しいひと時を共にすごしましょう。

●12月15日まで受け付けています。

◆演芸会担当 中島武宣・青山法義(大倭印刷内)

TEL 〇七四一-四四一〇〇二番 FAX 〇七四一-四四一〇九二番



あんない

*金鶏祭(大倭神宮)

12月4日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

金鶏祭については、『やわらぎの黙示』の「日本精神の源流―長曾根邑のすめらみこと」等

を読み、改めて「和の光」の心を自分のものとしたいものです。

*月次祭(大倭神宮)

12月6日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第575回祓会

12月11日(日) 午前9時より「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花邑境内の大掃除です。昼食は用意されます。

これに先立ち8時より大倭墓地の大掃除が行われます。

*月次祭(大倭神宮)

12月15日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

*日聖祭(大本宮拝殿) 及び直会演芸会

12月23日(祝) 大倭元旦。

上の「ご案内」をご覧ください。

*大倭神宮境内・周辺大掃除

12月25日(日) 午前9時より、有志の皆さんはご参加下さい。昼食は用意されます。

12月25日(日) 午前9時より、有志の皆さんはご参加下さい。昼食は用意されます。